

は北邊隨筆、萬葉燈、並に古事記燈大旨の一部の外、殆んど公刊されるに至らなかつたものである。従つて本書御杖集第一卷は、左の如く、彼の古典研究の諸著を收録編纂したものであるが、之によつて今後は容易に彼の學問體系の研究に入り得る事となり、學者の利便を得る事多大である。

○古事記燈大旨(帝國圖書館藏) ○古事記燈卷一七神三段神世七代第一
一(帝國圖書館藏) ○古事記燈三(帝國圖書館藏) ○古事記神典燈
(帝國圖書館藏) ○古事記燈四四神生之段(帝國圖書館藏) ○古事記燈
大御寶之件(帝國圖書館藏) ○古事記言七神三段(倉野憲司氏藏) ○古
事記燈神典天地初開第一(京都大學國文學研究室藏) ○古事記燈卷
之一七神三段神世第一(加賀典三郎氏藏) ○古事記燈神典源能恭昌島、先
言、改言(上田萬年氏藏)

特に卷頭に掲げられた志田氏の御杖小傳及び本書解題は、彼の傳記及び著作の説明に約五〇頁を割き、文化五年に刊行された古事記燈大旨に就いては、諸本の異同ある部分を改稿本(京都大學本)、脱稿本(帝國圖書館本)、刊本(同上)と三段組にして内容の比較に便ならしめ、彼の學問の發展の經過を指示せんとしてゐる等、懇切を極めたものである。(東京國民精神文化研究所發行、菊版、洋裝、四二九頁、價參圓)(内藤)

日本城郭史

大類 仲共著
鳥羽正雄

日本城郭の研究に就いて、本年は二つの輝やかなしい成果を世に

送つてゐる。一は十月に刊行された古川重春氏著「日本城郭考」であり、一は續いて十一月に出版された、大類仲博士、鳥羽正雄氏共著の「日本城郭史」である。

古川氏は建築の實際に携る専門家である爲、その著はす「日本城郭考」は我國古代から最近世に至るまでの代表的城郭に對し、細微に互つて、その専門的立場から分析解明の筆を馳せてゐる所に特色がある。それに對して後者は、言ふまでもなく我國城郭史の組織的綜合的研究を開拓された大類博士と、永年史蹟の實際に就いて精密な調査を續けられつゝある鳥羽氏との協同著作である故に、極めて微に入り細を穿つた研究の集成であると同時に、全體を一貫して、城郭研究といふものを一般日本歴史の發展の裡に組み入れんと意圖した所に、その特色があると思はれる。

本書の構成は太古から明治維新までの間を、上世、中世、近世、最近世の四期に大別し、更に各期を第一、第二の二期に分ち、その各期に就いて、總説、戰爭と築城、築城の種類及び構造の三項目を設け、それが更に夥しく多數の小項目を含んでゐるといふ、組織的な整然さを有してゐる。こゝにそれらの内容を詳細に互つて紹介する事は出来ぬ。しかし大體に於いて、「總説」には城郭を生成した時代一般並びに軍事方面を概観し、「戰爭と築城」には各期に於いて築城を必要とせしめ或はそれを特徴附けた諸事象等を概説し、併せて廣く實際營まれた城郭を網羅して詳細に立論してゐる。「築城の種類及び構造」では各期に於けるその特徴を詳述してゐる。而かも至る所に挿入せられてゐる圖版は、微細な記述に

關しても、我々の理解を著しく助けてゐる。

從來とても個々の精密な城郭研究は數多く公けにされてゐる。しかし大部分は夫々の視角から夫々の事例を解析し抽象したに止まつて、未だ完全にそれを再組織して日本城郭の歴史を構成する迄には至つてゐなかつた。勿論如何なる學問と雖も、限られた範疇があり、その視角と方法と態度とに特殊なものがある。即ち分科的性質を帯びてゐる。しかしそれは結局分科的綜合とも言ふべき態度にまで發展せしめられなければならない。この意味に於いて本書が精密な攻究の結果に成る幾多の小項目の集成であると共に、その綜合的部面に就いて深い關心が拂はれてゐる事を強く感ずるのである。就中、各時期の「戦争と築城」の項目の如きは、相聯關して、城郭を中心とする日本歴史とでも稱すべき組織を有してゐる。(菊版七三二頁、定價六圓、東京雄山閣發行)〔時野谷〕

東洋文庫地方志目錄(支那・滿洲・臺灣)

東洋文庫編

支那の地理、歴史を研究する者にとつて、彼の國の地方志が貴重な資料を提供する者である事は今更贅言を要しない所であつて、各國の大學、圖書館等に於いては銳意之が搜集に努力してゐるのである。東洋文庫の地方志の膨大な蒐集は遠く海外にまでその名を知られながら、未だ完全な目錄が公にされないので遺憾とされてゐた。然るに昨年十二月創立十週年記念として出版されたのが即ち本目錄であつて、收むる所二千五百五十部に上る。而も

之が採購には僅か十數年を費したのに過ぎないのであつて、當事者の不斷の努力に對して敬意を表すると共に、東洋文庫の豊富な財力にして始めて可能な事であるのを認めねばならぬ。その數量に於いては、支那の國立北平圖書館に次ぐ者で實に世界に誇るべき大蒐集である。我が國では内閣文庫に約六百部の珍本が藏せられてゐる外、之に次ぐ者としては東方文化學院京都研究所に凡そ千部に上る地方志が採集されてゐる。今まで知られてゐる重要な方志目錄は殆んど朱士嘉の中國地方志綜錄に收録大成されてゐるが、本書序文にもある通り、本目錄と對比する時尙多くの出入を見るのである。その内容について詳細點檢した結果、民國以前の者に就いて言へば綜錄未收のもの五十種を越え、その他從來天下の孤本と考へられてゐたもので之に收められてゐる者も少なくない。之が本目錄が獨特の價值を持つ所以である。従つて此の上に、靜嘉堂、前田家尊經閣の目錄及び本年六月出版された國立北平圖書館方志目錄二編等を加へて中國地方志綜錄の補遺を作ることが出来るのである。本書の分類は蒙古西藏を除き省別として大體北部・中部・南部支那の順序に配列し、滿洲國臺灣を別に附載としてをり、各省内に於いても府の順序は乾隆二十九年の一統志以後の制に基きながら、直隸州を適宜その間に照按する等、編者の新しい努力が認められる。尙終りに、索引索引を附して使用者の便利を計つてゐるが、更に各府州間の限界を一目瞭然たらしめ、各所屬の縣名を一應列擧する等の用意があれば一層便利であると思ふ。(昭和十年十二月東洋文庫發行、四六倍版、非賣品)〔日比野丈夫〕